

柳宗元の〈狂〉について：「李赤傳」を中心に

KURODA, Mamiko / 黒田, 真美子

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

61

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2010-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007063>

柳宗元の〈狂〉について —— 「李赤傳」を中心に ——

黒田 真美子

柳宗元（七七三―八一九）、字は子厚。河東（山西省）の人と称するが、都長安に生まれ育った。二十一歳で進士及第。同期に劉禹錫（七七二―八四二）がいる。自他ともに認める若手のエリート官僚として出発するが、王叔文・王伾を中心とする永貞の改革（八〇五）に参加し、改革の挫折後、永州（湖南省）司馬に左遷される。劉禹錫ら他の七人の同志も各々、南方に流された。世にいう「二王八司馬事件」である。十年後、都に呼び戻されるが、すぐに更に遠い柳州（広西省）に赴任させられる。四年後、柳州で死去。最後の官職、柳州刺史に因んで、柳柳州、また、本籍から柳河東とも称される。

序章

柳宗元は、唐代屈指の自然詩人の一人に数えられており、代表作「江雪」は、唐詩の選集には必ずといってよいほど採録されている。

千山鳥飛絶	千山	鳥	飛ぶこと絶え
萬徑人蹤滅	万径	人蹤	滅す
孤舟蓑笠翁	孤舟	蓑笠の翁	
獨釣寒江雪	独り釣る	寒江の雪	

「千山」という冒頭の語が、雄大なランドスケープを提示し、それに続く「鳥飛絶」が、無限の天空を現出させる。対句で受けた承句は、「千」から「萬」へと数を増し、仰角から俯角、天から地へと視線を転じながらも、起句同様に、生物の存在を否定する。それも入声の強い響きで。それらは、元々存在しないというのではなく、あったものが「絶」「滅」として表現することで、静寂が一入際だつ。視覚的には勿論、聴覚的にも「絶無」の空間が、構築されるのである。と思いきや、ポツンと浮かぶ一艘の小舟。たちまちそこに焦点が絞り込まれる。無生物と思われた世界に、一人の人間がいた。すべてをそぎ落とした体言のみの五言で、それが語られる。「蓑笠」をつけた一人の翁。降りしきる雪を凌ぐための「蓑笠」は、具体的な翁の姿を浮かび上がらせる一方、同時に、抽象

的存在でもある。何となれば、蓑笠によって全身を覆われた翁は、外部からは顔も見えない没個性の存在と化している。外的世界と断絶した、正に「孤」「獨」の内的世界に埋没しているのである。起承句頭の「千」「萬」と対置されることで、転結句頭の「孤」「獨」が、一層強調されている。

北宋・蘇軾（一〇三六―一一〇一）はこの詩を、「殆ど天の賦する所にして、及ぶ可からざるのみ」（『東坡題跋』卷三）と評し、南宋・劉辰翁（一二三二―一二九七）も「天趣を得たり」（明・高棅『唐詩品彙』引）、明・胡應麟（一五五一―一六〇二）も「句格天成」（『詩數』卷六）と述べ、一様に「天」という語を用いて、世俗を超越した孤高の興趣を指摘する。心情描写を極力排した叙景性を貫くことで、厳しいまでの孤寂の世界が構築され、「清峭已だ絶なり」（清・沈德潜『唐詩別裁集』卷一九）の評の如く、雪景色の清絶な美しさが際だっている。この印象が、柳宗元の一般的イメージを決定づけているといえよう。すなわち、超俗清雅の文人というイメージである。確かに彼の作品、殊に自然詩は、紛うことなくその評を妥当とするであろう。また唐宋八家の一人である古文家としての著名な作品、所謂「永州八記」も、そのイメージを大きく損なうことはないかもしれない。だが、彼には、そのイメージを裏切る、対蹠的作品が存在する。その一つが「李赤傳」である。^①

まず梗概から記そう。

李赤は江湖の浪人であった。李白並みの詩人という自負から「李赤」と号した。宣州（安徽省）に友人と遊びに行くが、友人は

途中寄り道し、遅れて着くと、李赤は女性と話している。この女性性は嫁を世話してくれる仲人だと紹介した。李赤には妻がいるので、友人は気が狂ったかと思った。しばらくして婦人がまたやってくる、手ぬぐいで李赤の首を締め上げた。友人が叫ぶと彼女は逃げ去ったが、李赤は逆に怒った。その後、厠に行ったらそのまま帰らない李赤が心配になって友人が見に行くと、彼は肥瓶を抱いて笑っており、今にも下に入りそうな様子だった。友人が引き留めると逆上し「絶世の美女と豪華な住居で会っていたのに、邪魔をするな」と怒った。友人は彼がその館の厠鬼に魅入られたと思い、そこから立ち去らせた。三十里行ったところに泊まったが、また危ないところを助けた。さらに他県に行ったが、その宴会場で、李赤は隙を見て厠に立てこもり、危機一髪を救け出された。巫師をつけて守らせたが、深夜、皆が眠り込んだ隙に厠に行き、目を覚ました人が探し回ると、厠で死後かなり経過した李赤を発見した。

「江雪」詩のイメージからして、柳宗元が作者とは到底考えられまい。その理由は端的に言えば、李赤の友人の言葉に凝縮されよう。

豈狂易して病み惑ふや？（豈狂易病惑耶？）

正常である友人から見れば、李赤は発狂したとしか考えられなかったこと、さらに決定的なことは、発狂の場が「厠」という汚濁の場所であったことである。「清雅」のイメージを持つ柳宗元が、なぜかような「汚

濁」の文章を書いたのか、それが彼にとっていかなる意味を有していたのか、あの「江雪」とはどのような関係にあるのか、拙論はこれらの疑問を考察することで、柳宗元文学の特質の一端を明らかにしたい。

第一章「李赤傳」について

最初に、あまり名誉でない伝記を書かれた李赤という人物について記そう。

個人の伝記は、周知の如く、司馬遷『史記』の「列傳」に始まり、後世、正史において脈々と継承された。だが清・顧炎武（一六一三―一六八二）は、史官が記す史伝とは異なる「傳」の存在を指摘し、漢・東方朔（前一五四―前九三）の手に成る「非有先生傳」²を嚆矢としている。その流れを継ぐのが、韓愈「毛穎傳」、柳宗元「蝨蝨傳」³そして「李赤傳」と列記し、それらは〈戯〉の「寓言」であると説いている。⁴「非有先生」は、「烏有先生」（司馬相如「子虛賦」）同様、名前からして実在しない人物であり、「毛穎」は擬人化された筆、「蝨蝨」は背中に物を上手に載せる小虫である。つまり顧炎武は、李赤を柳宗元が創作した虚構の人物と見なしている。だが、以下に見るように、彼はどうかやら実在の人物であったようだ。

北宋、太平興国三年（九七八）成立の小説類書『太平廣記』（以下『廣記』と省略。また巻数のみは『太平廣記』の巻数）巻三十四（鬼二六）に「李赤」と題する一篇（出『獨異志』）が収録されている。骨子は柳宗元の「李赤傳」と同様であるが、「李赤傳」が時代も場所も不明

確であるのに対して、「李赤傳」の約三分の一という短さ（百九十七字）の中に、事実関係が、より具体的に記述されている。それによると、李赤は徳宗の貞元年間（七八五―八〇四）の人物で、呉郡（江蘇省）の進士だという。唐代の科擧及第者の記録である『登科記考補正』巻二七には、李赤を貞元の進士として挙げている。⁴案語として『姑蘇志』巻五、『呉県志』巻三三を引き、両書の注に「貞元中、信安に寓し、厠鬼の殺す所と爲る、獨異記に見ゆ」とあると記す。『獨異記』とは『獨異志』のことで、古今の異事を搜集して編み、晩唐、宣宗から僖宗の乾符元年の間（八四六―八七四）に成った書とされる。⁵従って、「李赤傳」より三、四十年後に記されたことになるが、前述の李赤の時代や出身地、進士という履歴の他、「李赤傳」では記されていない、友人の名を「趙敏之」、厠鬼の名を「郭氏」と明記し、場所も閩（福建省）へ行く途中、衢州信安（浙江省）から三十里の宿駅で、最初の事件が起き、次に南下して建中駅に行き、最後に閩で亡くなったと、具体的に記述されている。恐らく、貞元年間のこの事件は、当時から衝撃的事件として広く流伝され、柳宗元も『獨異志』の編者も見聞したのであろう。それを柳宗元は後述の如く、李白のパロディとして変容させ、編者の方は、志怪記事として、伝聞をそのまま記録したと考えられる。

さらに北宋期には、李赤が実在の人物として捉えられていたことが、蘇軾の次の記載（概略）からも明らかである。⁶

姑孰（安徽省当塗県）を通った時、李白の作とされる「十詠」を読んだが、詩語が薄っぺらく、李白の作ではないと思った。王安

国に拠れば、それは李赤の詩で、秘閣に李赤の別集があり、その中に、この作があつたという。

今『全唐詩』巻四七二に李赤の作として「姑孰雜詠」十首（五古四韻）と題する詩が収められているが、それが「十詠」である。王安国の官職は、彼の本伝によれば秘閣校理である。⁷⁾それゆえ、秘閣中の書籍を閲覧できたのであり、当時『李赤集』が存在していたという信憑性は高いと考えられよう。

以上のように、李赤は実在して、詩集も上梓していた蓋然性が高いといえるが、柳宗元はその人物の伝記を、どのように著しているか、『獨異志』の「李赤」と比較して、柳文の意図と特質を考察する。

第一節『獨異志』所収「李赤」との比較Ⅰ

『獨異志』は前述の如く、冒頭、時代と出自を記すが、「李赤傳」はそれを省き、「李赤は江湖の浪人なり」と漠然と始めている。これについては、次の二点を指摘できよう。一つは、不名誉な内容の伝記であるため、李赤に対する配慮として、曖昧にしたと考えられるのである。これは後述の「河間傳」で、冒頭、彼女は「淫婦人」なので、姓をいわず、村の名前で呼ぶことにしたとあるのと同じ配慮といえよう。これは後述する論賛でも明らかなように、柳宗元は李赤（や河間にも）に対して同情的で、嘲笑する世間を逆に非難しているからである。第二点は、時代も出自も不明にすることで、李赤は「非有先生」同様、非実在の存在に近くなり、柳宗元の虚構世界で、より自由に振る舞わせることができる

のである。その意味で、顧炎武が、「李赤傳」を「毛穎傳」「螭蜃傳」と列記したのは、妥当といえよう。この虚構化によって、李赤は、本伝の中で実に生き生きと喜び且つ怒るのである。

次いで柳宗元は「李赤」という名の由来を、彼自身の一人称で「わしは詩作を得意とし、李白並の才能じゃ（吾善爲歌詩、類李白）」と豪語させている。そして友人と遊びに行つた先は、「宣州」である。これは先述の姑孰と同じ安徽省当塗県で、いうまでもなく、李白終焉の地である。つまり先の「李白並の才能」に合わせた地名を選択しているのである。いわば、李赤を李白のパロディとして描き、虚構化を決定的にしたのである。その結果、『獨異志』にはない精彩に富む言動が可能になった。例えば、最初に「婦人」が李赤の首を絞める場面では、

李赤自身、両手で自分の首を絞めて、彼女を助け、舌が付け根からベロンと出てしまった。（赤両手助之、舌盡出。）

と、その危うさをリアルに形容する。友人が大声を出して女を追いつつた後、李赤は手紙を書き、その後、厠に行つたまま帰つてこない。不審に思った友人が見に行つて、ギョツとする場面が次のように記される。

李赤は厠で便器を抱きかかえ、焦点の定まらない眼をし、ニタニタと不気味な笑いを浮かべて、今にも肥溜めに下りようとしていた。（赤軒厠抱甕詭笑而側視、勢且下。）

中国の廁の構造は、時代や地域によって様々だが、「病膏肓に入る」の故事成語で有名な春秋時代の晋・景公が廁に落ちて亡くなったように、その深さは死の危険性があつた。李赤もあわやというところで、友人が引きずり出して、助けたのである。すると李赤はカンカンに腹を立てて言つた。

わしはもう広間に上がつて、我が妻に会つていたのに。妻は絶世の美貌で、広間の装飾も、豪壮華麗、山椒や蘭の芳しい香りが豊かに立ち上つていたぞ。(吾已升堂、面吾妻。吾妻之容、世固無有、堂之飾、宏大富麗、椒蘭之氣、油然而起)

と自慢した後、お前のいる世界は「溷廁」で、妻の住居は天帝の「清都」のような所だと、二つの世界を比較する。この対比が、後述の論賛で繰り返され、柳宗元がこの伝記に込めた主意と関わるので、留意しておきたい。またこの場面で、初めて友人は、あの「婦人」が「廁鬼」であることを悟つたのである。

「李赤傳」の後半については後述することにして、その前に、ここで中国の「廁鬼」と「廁神」について、記述する。「鬼神」という言葉があるように、「廁鬼」と「廁神」は区別されないことが多い。頻度としては、「廁神」の方が圧倒的に多数である。だが柳宗元が「廁鬼」という言葉を用いている以上、拙論ではその違いを意識したい。尹飛舟等『中国古代鬼神文化大観』⁹⁾は廁の鬼神を右の二つに分類している。「廁神」には、「後帝」と「紫姑神」を挙げる。「後帝」とは、その淵源は不明だ

が、六朝宋、劉敬叔『異苑』(巻五)に、西晋の大將軍、陶侃(二五七〜三三三)が、廁の中で出会つたとされる。朱色の衣を着て、「平上幘」(上部が平たい頭巾)をかぶつた人間の男性の姿で「後帝」と名乗り、三年間、この出会いを口外しなかつたら、富貴を極めるだろうと予言した。早くに父を亡くし、極貧で育つた陶侃の異例の出世¹⁰⁾に因む話である。この他に、南朝宋の孝武帝の時、三公に次ぐ位を極めた沈慶之(三六八〜四六五)も天子の行列を率いて廁の中に入る夢を見、夢占いの者に、将来の出世を説かれていた(『異苑』巻七)¹¹⁾。すなわち、「後帝」は、人間に害を及ぼさず、吉兆を告げる善神といえよう。

一方「紫姑神」は、元来ある家の妾で、正妻に妬まれ、汚れ仕事ばかりさせられて、正月十五日、憤りのあまり死んでしまった薄幸の女性である¹²⁾。だが、その命日に、廁や豚小屋に供え物を祀ると、様々な問いに答えたり、桑・蚕の出来具合や未来の予言をしてくれる。つまり紫姑神は人間に情報を与え、人間の役に立つ善神なのである。人々がその死を哀れんで神格化した神であり、恨みを吞んで死んだとはいえ、害を加える「幽鬼」ではない。「李赤傳」に登場する「廁鬼」と同様、人間の女性の姿をしているが、人の首を絞めて死に至らしめるような攻撃性は皆無である。したがって、「李赤傳」の鬼女と紫姑神とは、直接的には無関係といえよう。

以上のことから、尹氏の説く「廁神」とは、人間の姿をしていて、人間に幸福をもたらす善神と考えられよう。それに対して「廁鬼」は実に多様である。異形もあれば、人間の男女の姿もある。予言も吉兆、凶兆両方を口にしていて

異形の例を挙げれば、「大きな豚のような姿で、体中に眼がある」という何とも不気味な廁鬼だが、その出現の十日後、家の主は將軍に出世したという（巻三三三「刁繡」出『紀聞』）。しかし「大きな耳に落ちくぼんだ目、虎のような鼻に、豚のような歯、顔は紫色でまだらになっている」（巻三三三「王昇」出『紀聞』）、これを見た人物は、帰宅後すぐに亡くなった。東晋の征西將軍、庾亮（二八九～三四〇）も、廁の中で、両眼が真っ赤で体が光り輝いている「方相」¹³のような異形が地中から出て来るのに出くわし、その後すぐに亡くなったという（巻三二一「庾亮」出『甄異録』）。「廁鬼」の「鬼」は中国では幽鬼（幽霊）を意味することが多いので、やはり「死」との関係が深いといえよう。柳宗元が頻度の高い「廁神」（『獨異志』も「廁神」を用いている）ではなく、「廁鬼」を用いているのは、李赤が憧れる廁の世界は、死への誘いであることを意識したからと考えられるのである。

第二節『通幽記』『李咸』との比較

これまでに数例の「廁神」「廁鬼」を列挙したが、最後に「李赤傳」の「廁鬼」に最も類似する話を記す。李咸という男の異事体験（巻三三七出『通幽記』）である。

①代宗の永泰年間（七六五）、王容と従兄弟の李咸が荊襄（湖北省）へ行く途中、鄧州（湖北省）に泊まった。②深夜、眠れないでいた王は、庭で絶世の美女が李咸を手招きしているのを見た。③李は起きあがると、女の所へ行き、親しげに話している。王は遠く

から様子を伺っていた。④李は一人戻ると、台所の灯火の下で手紙を書くと、出て行った。⑤二人は中庭にある堂に入って行く。王は頃合いを見計らって二人を冷やかそうと堂に入った。⑥女が李の首を絞めている最中で、その顔は三尺あまりにも伸びていて、目鼻もなかった。⑦王が叫ぶと女は逃げて、台所の長椅子に腰を下ろしたが、頭が天井まで届いた。⑧ほどなくして女の姿は消えた。李は耳や目鼻から血を流していたが、心臓はまだ暖かかった。⑨魂呼びいをする、明け方、李は生き返った。⑩李の手紙は家族宛で、別れの言葉が書かれていた。⑪言葉が話せるようになってから問うと、李は美人が夢の中で誘っただけと言い、他のことは何も覚えていなかった。⑫宿駅の小役人は、廁の中に神がいて、先天年間（七一二）にも使者が殺されたと言った。

『通幽記』は、『新唐書』藝文志小説家類に「陳邵、一卷」、『崇文總目』小説類に「陳邵撰、三卷」と著録され、宋代からすでに巻数に乱れが見え、現在、『廣記』に逸文二七條が残るだけである。陳邵についても、成立年代についても未詳だが、各篇の時代背景は、徳宗の貞元九年（七九三）が最も遅いので、それからほど遠くない貞元間に編まれたと推測される。そうすると後述の如く、元和年間（八〇六～八二〇）に書かれたと考えられる「李赤傳」¹⁴より先行することになり、柳宗元が「李咸」を読んでいたら可能性は少ない。

「李赤傳」の「李咸」と共通する部分の番号とモチーフを記すと、①男二人の旅立ち ②女性の出現 ④手紙を書く ⑥女性による首絞め

⑩別れの手紙 である。この五モチーフは「李赤傳」の概要に相当し、「李赤傳」の枠組みは、ほぼ「李咸」を踏襲していると考えられよう。だがその印象は大いに異なる。以下に二篇を比較する。

「李咸」は、夏の一晚の時の経過を接続詞や副詞を多用して、刻一刻表していく。⁽¹⁵⁾ その時間軸に沿って、従兄弟王容の目を通した空間移動を逐一記して臨場感を盛り上げ、⑥⑦の首を絞める場面が圧巻である。堂の簾をくぐって中に入ろうとした王容の眼に飛び込んで来たのは、美女との交歓の場面のはずが、何とろくろ首で、のっぺらぼうの妖怪が、李咸の首を絞めている姿だったのである。ここにこの篇のクライマックスが認められよう。一方、「李赤傳」の方は、三日に亘る長さに延びており、危機も最後の場面を含めると計五回にもなるが、女が登場するのは、最初の首絞めの時だけである。それに代わって圧倒的存在感を發揮しているのは、いうまでもなく李赤である。李咸は感情表現はおろか、殆ど一言も発せず、まさに夢遊病者のように、女の指示に従うだけの受け身の存在である。それに対して、李赤は前述の如く、大いに喜び、大いに怒り、廁の世界を誉め称え、自らの意志で積極的に入っていくとするのである。この比較対照によって明白になるのは、異事の所以の相違である。人は李咸をたまたま運悪く鬼女に魅入られた被害者とみなすだけで、その原因を彼自身に求めはしないだろう。だが李赤の場合は、きつかけはともかく、その後の彼の異常な振る舞いが繰り返し描写されることによって、彼自身の狂気がクローズアップされてくるのである。後述の如く、論賛で柳宗元が「これは精神病のせいなのか、それとも本当に厠鬼のせいなのか（是其病心而是耶、抑固有厠鬼耶）」と問いかけ

るが、その問いかけが十分成立し得るといえよう。

このほか結末の生死の相違や、微細な齟齬はさておき、大きな相違は「厠」というトポスの有無である。「李咸」の方は、一晚という短い時間の間に、めまぐるしく場所を移動するが、遂に厠は見当らない。それに対して「李赤傳」では終始一貫して「厠」が危難の場となっており、それによって生々しいリアリティが醸し出されている。怪異という超常現象をテーマとしながら、それは最初の首絞めの場面だけで、後は常に現実的時空を背景とした、現実的描写に終始しているのである。

以上の比較から、「李咸」の重点は、男を誘って殺そうとする女妖の怪異とその正体であるのに対して、「李赤傳」では、「厠」というトポスを背景にした李赤の狂気が浮かび上がってきたのではないだろうか。

第三節『獨異志』所収「李赤」との比較Ⅱ

「李赤傳」後半についてはすでに部分的に触れたが、ここでももう少し詳細に考察する。友人の救助によって最初の危害を免れた李赤は、その後どうなったのか？『獨異志』の方は、翌日南下して、一度危ないところを厠で発見されるが、その後も旅を続け、十日後、目的地の厠に着する。彼はそこで歓迎の宴席から姿を消し、趙敏之が搜索すると、厠で息絶えていた。わずか七十四字のこの部分が、「李赤傳」の方では、二倍以上にふくれあがり、友人のみならず、下僕や他県の人まで巻き込み、巫師に祈祷してもらったりする大騒動になっている。二度目に厠で発見されるときは、特に詳細である。

李赤は厠の入り口に長椅子をたてかけてバリケードを築くが、それを

こじあけて入ってみると、彼の顔は糞尿にまみれていたので洗い流したと、極めてリアルに表現されている。李赤がいかに廁の世界を切望していたかが強調され、それによって、彼の鬼気迫る狂気が印象づけられるのである。そして遂に、最後の場面になる。

夜半、見守っていた者が、皆疲れ果てて寝込んでしまった。ハツと気がつくと、彼がいないので、口々に赤の名を叫びながら探し求めたところ、両足が廁の外にはみ出ているのが見えた。死後、かなりの時間がたっていた。(夜半、守者怠、皆睡。及覺、更呼而求之、見其足於廁外、赤死久矣。)

「守る者怠り、皆睡る」李赤に振り回されるだけ振り回され、やれるだけのことはやって疲れ果てて寝込んでしまった様子がこの五文字から浮かび上がる。この表現は、岡本不二明「(李赤傳)のグロテスク」¹⁶⁾が指摘するように、初唐の伝奇小説「補江総白猿傳」を想起させる。六朝梁末の將軍、歐陽紇が南征して山間に入ったとき、同道してきた妻を白猿にさらわれる場面である。村人から誘拐の恐れを聞いた將軍は、美しい妻を守るために、二重三重に取り囲んで嚴重な警備を施す。だが、

その夜はどんよりとした暗い闇の中、不気味な風が吹いていたが、明け方近くなると、物音ひとつせず、ひっそりと静まりかえった。兵士も侍女も気が緩んで、うとうとと眠ってしまった。何か物の気配がして、ハツと気がつくつとすでに妻の姿は消えていた。(爾夕、

陰風晦黒、至五更、寂然無聞。守者怠而仮寐、忽若有物驚悟者、即已失妻矣。)

いかにも不吉なことが起こりそうな夜の様子、明け方、緊張が緩んだその隙に事が起こる緩急のリズム表現は、六朝の怪異記録である「志怪」とは一線を画して唐代伝奇の始まりを象徴している。「志怪」と「伝奇」の相違は、紙幅の都合で詳述できないが、簡潔に述べれば、前者は、怪異事実の記録であり、作者の創意はないのに対して、後者は、作者が虚構性や文彩に創意工夫を凝らした意識的創造である。そこに怪異の要素があっても、比重は怪異よりも人間と人生を描出することにある。先に、「李赤傳」について、李赤は実在しながらも、虚構化された存在であることを指摘した。また、虚構故のリアリティの追求に再三言及した。そしてここにも伝奇作品と類似した表現技術を認めることができる。そうすると「李赤傳」は、作者柳宗元の創意によって独自の世界が築かれた伝奇作品ではあるまいか。即ち、「李赤傳」は、一見、怪異への関心を綴った「志怪」、あるいは「史伝」の体裁を取って社会や政治への諷諫を託した寓意作品と見せながら、その本質は、作者柳宗元自身のパトスを核とする創作といえよう。柳自身は「寓言」の意図で綴ったにしても、その結果、完成された作品は、その意図を超えてしまった。廁の世界への執拗なまでの執着と鬼気迫る狂気の描写は、単なる「寓言」とは看做し得ないのである。

最後に述べるべきは、『獨異志』に欠けている論贊についてである。『史記』列傳を持ち出すまでもなく、伝記の篇末に記述者の論評を加え

ることが、史伝の体裁となっている。柳宗元もそれを踏襲して、李赤への論評を次のように述べている。「李赤の伝はでたらめではない。彼は心を病んでこのようになったのか、それともそもそも厠鬼は存在するのか」と始め、彼は元来、長江一帯に名を知られた士人で、常人と変わらなかったと記し、李赤の「普通さ」を強調する。だが一旦、怪異に惑わされると、「逆に世間を厠とみなし、厠を天帝の住居のある清都とみなした（反以世為溷、以溷為帝居清都）」。今の世の人々は、李赤の惑乱を笑うが、果たして笑える人間は何人いるかと、以下、辛辣な評語が続く。

是非の判断、取捨選択、諾否をする場合、決して李赤のように惑わないでおれる者は、一体、何人いるだろうか。物欲や好き嫌いによって、魂が身から離れて迷い出しても、己の身を修め慎んで、魂が戻ってこない事態を免れれば、幸いである。（及至是非取与向背決不為赤者、幾何人耶。反修而身、無以欲利好惡遷其神而不返、則幸矣。）

だがそれは難しいことで、李赤が普通の人間であったように、普通の人間なら誰しも惑う可能性がある。それゆえ「李赤を笑う余裕など、誰にも無い（又何暇赤之笑哉）」と締めくくるのである。ここには恐らく永貞の事件によって、皆が憧れる若きエリート官僚から、突然、瘡痍の僻地へ左遷された柳宗元の体験が、影を落としているのであろう。永州左遷後、都の長官、許孟容に宛てた手紙（「寄許京兆孟容書」卷三〇）でも、嘗ては利益や出世を求める人々が、柳宗元の門戸に溢れんばかり

だったのに、改革挫折後は、手の平を返すように去ってしまい、「盡く敵讐と爲」つたと訴えている。都での華やかな人間関係は、すべて失われてしまったのである。

斯くの如く、この論贊には彼の挫折体験に基づく辛辣な人間観が認められる。「李赤傳」が、先行研究によって、是非の転倒した社会への批判をこめた作と評される¹⁸所以である。その見解は否定しないが、単にそれだけではない。拙論では、李白が「狂」状態に陥る前は、極めて普通の人間だったと強調されていることに注目したい。いわば発狂の普遍性の主張である。さすればそれは柳宗元自身、自らの狂気の可能性を凝視していたことではないだろうか。こうした観点から、「李赤傳」を読み返せば、民国初、林紓が、李赤は柳宗元自身で、僻地への没落を厠に落ちたことに喩えていると指摘する¹⁹のは、示唆に富んだ説といえよう。

以上、主に『獨異志』『通幽記』との比較によって、柳宗元が実在したと考えられる李赤という人物を虚構化し、それ故のリアリティを追求する中で、李赤の生々しいまでの狂気を描出し得たことを明らかにした。その生々しさは、単なる人間社会への諷刺という解釈を超えて激しく迫ってくる。そのパトスは一体何なのか、次章では対象領域を広げて、さらに考察を深めたい。

第二章 柳宗元の〈狂〉について

第一章では、「李赤傳」に則して論述したが、本章では対象領域を他の柳宗元詩文に広げるとともに、同時代で、同じく「唐宋八家」の唐代

の双壁とされる韓愈（七六八～八二四）の〈狂〉とも比較して、その特質を考究したい。

第一節 柳宗元の〈狂〉

『柳宗元集』には「李赤傳」（「狂易」）の例も含めて、総計五十八の〈狂〉の字が認められる。²⁹ それらの意味するところは、次の三種に大別される。①異常事態（戦乱・火事・肉親の死など）の形容や動物・謀反人・蛮族などの狂的性癖の表現 ②人物批評 ③自己表現である。①は一般的表現で、特に柳宗元の独自性は認められないので、ここでは、まず②の人物批評を中心に、その特質を考察する。

〈狂〉の字を用いる人物批評には、ある人物に対する世間や世俗の否定的評価の語として用いられる場合と、柳宗元自身がその人物に対する批評を表す場合の二通りに分けられる。

前者の主な例の一つは、戦国楚の憂国の詩人、屈原（前三四三～前二七七?）に対してである。屈原の文辞（「離騷」など）を「世果たして是を以て之れ狂と為す」と述べ、柳はそれを心から哀しみ、「獨り憤りを蘊めて傷みを増す」と世間の評価に対して憤りを表す（巻一九「弔屈原文」）。屈原は楚国のために、忠義の情熱に燃えていながら讒言に遭い、柳宗元と同様、湘水に流された。「懷才不遇の士」として大いなる共感を持っている。この弔文でも「屈原はその心中を遺篇に託して嘆き、余はそれを読むと涙が臉に溢れる」と激しい調子で屈原を悼んでいる。

もう一人は、柳と共に古文家として肩を並べた韓愈に対してである。今の世に「師」はいると聞いたことがないが、「有れば輒ち譁笑して、

以て狂人と為す」。だが韓愈だけは、そうした風潮に抗って「流俗を顧みず、笑侮を犯し、後学を収召し、師の説を作り、因りて顔を抗^あげて師と為」る。それに対して、世間は大騒ぎで韓愈を罵るが、韓愈はめげずに反論する。「愈是を以て狂名を得たり」（巻三四「答韋中立論師道書」）。貞元十八年（八〇二）に書かれ、古文の代表作として知られる韓愈の「師説」に対する当時の世間の評価が、皮肉たっぷり書かれている。柳は、これに続けて、故事成語にもなっている「蜀犬 日に吠ゆ」を引き、見識が狭くて理解不能な世の人々を「蜀犬」に、韓愈の優秀さを、減多に現れない蜀の太陽「日」に喩えて擁護する。ここにも見えるように、韓愈は世間から〈狂〉と看做されることが多かった。韓愈の〈狂〉とはいかなるものかは、第二節で考察する。

以上のように、柳宗元は世間の〈狂〉という評価に対して、強く異を唱えている。これはやはり当然の事ながら、〈狂〉を一般的な負の意味にとるが故の非難であろう。また柳宗元自身、謀反人などに対する批判の語として、〈狂〉を用いている。例えば、淮西節度使呉少陽の長子で謀反を起こした呉元斉を「狂狡 已に震ふ」（巻四七「上河陽烏尚書啓」）、徳宗の貞元十四年（七九八）諫議大夫陽城の事件で、彼の門生を「狂惑の小生有り、門下に依託す。或いは乃ち文を飛ばし愚を陳べ、醜行無頼なり」（巻三四「與太學諸生喜詣闕留陽城司業書」）などと記している。これらの否定的〈狂〉は、①の一般的、第一義的用い方といえよう。しかしながら、柳宗元は少なからず〈狂〉を肯定的な意味にも用いている。

例えば岳父楊憑の子息（亡妻の弟）である青年楊誨之への手紙で、彼

が秦漢時代の甘羅・終軍に憧れると言ったことに對して、次のように批判する。

二小子（甘羅・終軍）の道について、君に褒めそやしてもらいたくない。孔子は言われた。「是れ聞なり、達に非ざるなり（評判がよいだけで、本当の達成ではない）」と。孔子は彼ら二人をあゝの琴張・牧皮という「狂者」の列には並べない。（二小子之道、吾不欲吾子言之。孔子曰、是聞也、非達也。使二小子及孔子、曾不得與於琴張・牧皮²¹狂者之列。）卷三三「与楊誨之第二書」²¹

甘羅は十二歳で、秦の始皇帝の使者として趙に行き、趙王を説得し、趙の五城を秦の領土に差し出させた優れ者である。司馬遷は論贊で、甘羅は年少なのに、奇計を用いて説得し、名を後世に残した。「仁徳厚い君子とはいえないが、しかし彼もやはり戦国の策士といえよう。（雖非篤行之君子、然亦戦国之策士也）」と評価している。終軍²²についてはもう省くが、柳宗元にとっては、小手先の弁舌だけで成功しても「君子ではない」といい、それを、「狂者」ではないと表現するのである。すなわち、この「狂者」は、「篤行の君子」を意味し、孔子の言を用いれば、「達」した者といえよう。ここで「狂者」に挙げられている琴張・牧皮は、次のように孟子と弟子万章との問答の中に見える人物である（『孟子』尽心章句下、概略）。

万章が尋ねた。「孔子が陳におられたとき、故郷魯の国の²³狂簡（志

は大きいけれど、行為は粗略なこと）進取の²⁴狂士たちのもとに帰らねばと、あんなに懸命に言われたのはなぜですか？」孟子は答えた。「先生の理想は中庸の人物だが、出会えなければ、せめて²⁵狂狷の人物がよい、（狂）者は、進取の気性に富んでいるし、（狷）者は、不正不義を行わないからと言われたのだ。」²⁶重ねて万章は尋ねた。「どんな人物が（狂）といえるのでしょうか？」孟子が答えて「琴張・曾皙・牧皮のような人だ。」「なぜこの人達を（狂）というのですか？」「彼らの志も言葉も氣宇壮大だからだ」以下略。

以上のように、柳宗元が肯定的に用いている（狂）字には、『論語』『孟子』に基づく儒教的価値観²⁷が、裏打ちされていることが明らかにになった。上記の典拠によつて、柳宗元は確信を持って（狂）字を積極的に肯定し得たといえよう。

楊誨之に与えた先の手紙には、柳宗元の（狂）観念を知る上で、さらに注目すべき記述が見える。

孔子は七十歳で、思うがままに振る舞ったが、それは規範を越えないで済むと自ら推し量ったうえのことだ。今君は何歳だ、規範を越えないという自信があるかい？それなのに不羈奔放を好むとは！傳説は言った「惟れ狂なるも克く念はば聖と作る（惟狂克念作聖）」と。²⁸

これは『書経』「多方」に見える語で、夏殷の滅亡は天が捨てたからで

はなく、王が放縦をしたからだ、〈聖〉でもよく考えなければ〈狂〉となり、〈狂〉でもよく考えれば〈聖〉となるという記述を引いている。手紙ではこの文に続いて「狂奔」する猿山の猿でも訓練次第で、半日で人間の指示に従えるようになるという喩え話をして、「故に吾は夫の狂の聖と為るを信ずるなり（故吾信夫狂爲聖也）」と説くのである。すなわち、柳宗元は〈狂〉と〈聖〉の相関性を理解し、熟考次第で〈狂〉が〈聖〉になる可能性を指摘する。殷周革命の成功を告げる周公の誥命を踏まえる「多方」のこの文について、白川静『狂字論』は「聖が理性であるならば、狂は非理性」であり「両者はその相対性によってのみ実在する。そしてその極度の緊張関係は、亡国・革命のような、絶対的な絶望や比類のない昂揚の情念の中から生まれる」と説く。²⁷⁾ この解釈を柳宗元に即していえば、永貞の改革の挫折と左遷という「絶対的な絶望」に陥っている彼のメンタリティーを的確に明示しているのではないだろうか。彼は自らの狂気を、理性の限りを尽くして凝視していたのである。

以上の如く、前述の『論語』『孟子』とともに、この『書経』多方の記述は、柳宗元〈狂〉観念の重要な根拠と考えられよう。この〈狂〉と〈聖〉の関わり of 深さを前提に「李赤傳」を再読すれば、李赤の狂気が延いては柳宗元の狂気は〈聖〉に転ずる可能性を秘めており、彼はそれを「信じて」いたことになろう。そうなると「廁」という汚濁のトポスが持つている両義性が重要な意味を帯びてくる。廁は先行研究が多く指摘するように、ケガレの場所でありながら、穀物をまた富貴をもたらず糞壤信仰に支えられた聖なる空間²⁸⁾である。李赤が激怒して友人にいい、柳宗元が評語で再度取り上げて強調した「以世爲溷、溷爲帝居清都」は

柳宗元の世俗批判のみならず、自らの求める世界への希求だったのではあるまいか。李赤の悲劇を凝視することで、自らの悲劇を「克く念ひ」客観視し、〈聖〉への止揚の可能性を模索したのではないだろうか。李赤のように、真に狂い、死に至らないために。

第二節 韓愈の〈狂〉

柳宗元が〈狂〉を肯定的な意味に用いている例を、もう一つ挙げよう。それは上記と同じく韓愈に対してである。

韓愈は漢の司馬遷と揚雄とを敬っている。司馬遷は韓愈と甲乙つけがたい。だが、揚雄については、その『太玄』『法言』『四愁賦』のような作を韓愈はまだ作っていないが、もし本気で作れば、揚雄より大きなスケールで優れた作ができるだろう。その他の文章については、韓愈の方がはるかに勝っている。揚雄の措辞は、幅が狭くて滞りがちで、韓愈の自由奔放、「猖狂（猛り狂うこと）」で、思うがままに筆を滑らせるのに敵わないのだ。（退之所敬者、司馬遷・揚雄。遷於退之、固相上下。若雄者、如太玄・法言及四愁賦、退之獨未作耳。決作之、加恢奇、至他文過揚雄遠甚。雄之遣言措意、頗短局滯澁、不若退之猖狂恣睢、肆意有所作。）卷三四「答韋珩示韓愈相推以文墨事書」²⁹⁾

司馬遷と並ぶ才能と高く評価した韓愈の文章への批評の語として、「猖狂」が用いられている。柳宗元はこの語を他に三例用いている。例

えば海に消えた商人に呼びかける文（卷一八「招海賈文」）の中で、十五匹の巨大ウミガメがうなずくと「丘山頽れ、**猖狂**（しんげき）震（しん）撼（げん）して九垓を翻す」と『列子』に基づく典故を踏まえて、天変地異を形容している。従って韓文の評語としては、まるで天地が崩壊せんばかりに激動する動感溢れる文章という意になり、³⁰柳宗元の韓文への畏敬が明らかであろう。だが世間では上述の如く、韓愈は「狂人」と看做され、「狂名」を得たという。では韓愈自身、〈狂〉字をどのように用いているだろうか？

世綵堂本五百家注『昌黎文集』中に〈狂〉字は四十二例を認めうる。

内訳は卷一〜十の詩作品には二十二例、卷十一〜四十の散文作品には二十例である。詩作品に於ける〈狂〉字については、すでに三上英司氏に論考がある。³¹それに拠れば、韓愈の〈狂〉字は、「永貞期（八〇五）を境として」変化し、それ以前の若き不遇時代には「社会に受け入れられない自分に対する慰撫と時流に媚びない抗世の決意」を表し、不羈奔放な韓愈自身を表現する語として用いられている。だが貞元末から永貞にかけての陽山（広東省）への左遷時代には、その奔放さが減じるとともに、「他者に仮託」して表現されるようになる。さらに元和初年、中央官僚に復帰以降、所謂「韓門」の中心人物になると、「自由奔放な精神の躍動や文学の完成をめざす強い決意」として「詩中の虚構の世界」で用いられ、怪奇性の顕著な詩風の確立に寄与したと説く。

散文作品に於ける用例もほぼ同様の傾向が見られるが、以下に見るように、詩作品中よりもっと生々しい心中の吐露が見出せる。それらは柳宗元と同様、①謀反などの異常事態、②他者を表現、③自己表現の三

種に分けられる。頻度としては①が最多で十例だが、一般的用法で、獨自性は見られない。次いで③が七例。これはいずれも製作年代が明らかで、³²二つの時期に分類される。一つは貞元十〜十五年の若き不遇時代で、もう一つは、晩年元和十四年（八一九）で、憲宗への仏教信仰批判による潮州（広東省）刺史左遷の時である。

前者の時期には四例³³認められ、例えば、友人崔立之に当てた手紙の中に見える。この手紙は貞元十一年（七九五）、二十八歳の時、三度目の博学宏詞科不合格の直後に書かれたもので、崔の慰めと励ましに対する返書である。

冒頭から、韓愈は自らを、世の人々と合わず「君子」はおろか「小人」からも「憫笑」されていると記す。これは先に引いた柳文の「流俗を顧みず、笑侮を犯」し、「狂名」を得ている姿と合致している。だが韓愈は「天下の風俗は尚ほ未だ古に及ばざる者有り」として、古代に劣る今の世に迎合するつもりはなく、毎年続けて三度も自分を落とした博学宏詞科の評価こそ誤っている、それゆえ崔の気持ちは有り難いが、見当違いだと記す。五年前、すでに同科に及第していた先輩の崔にしてみれば、心穏やかならぬ言辞であつたろう。次いで韓愈は、自分の目指すのは、出仕できれば「主上」「宰相」の憂国の原因を取り除き、できなければ「國家の遺事を求め、賢人哲士の終始を考へ、唐の一經を作りて、之を無窮に垂れんとす」ることと、誇らかに記す。ここにすでに「韓愈の〈古〉への志向」³⁵を看取し得るが、最後に「足下微（な）かりせば、以て吾の**狂言**（きやうげん）を發する無し」と結ぶ。この「狂言」には三度の落第で世間の目に映じているであろう己の姿を揶揄するニュアンスや謙遜のポーズは

あつても、自己卑下は皆無である。あくまで世間の尺度による表現であり、それを逆手に取って世間に投げ返してやろうという「丈夫の本領」(清・沈徳潜『唐宋八大家読本』当該文評語)が痛々しいまでに表れている。続けて三度の下第は、自恃が強ければ強いほど衝撃が大きいだろうことは、想像に難くない。穿った見方をすれば、単なる負け惜しみとも取れよう。友人への私信ということも、その見方を可能にする。だが韓愈は決して単なる負け惜しみを述べたわけではない。なぜなら彼は同時期、下第直後、宰相に三度も上書し、⁽³⁶⁾ いわば公的に同様の価値観と自負を述べているからである。最初の上書では、能力ある人材登用の重要性を『孟子』を中心とした儒教の經典を引いて力説し、自分こそ「邪を抑へ正に與し、時俗の惑ふ所を辯じ、云々」と自負を語る(「上宰相書」)。だが宰相からの返事はなく、十九日後二番目の上書を草す。その中に〈狂〉字が見える。⁽³⁷⁾

自分は長年の間、道の険しさを考える暇もなく、ひたすら学問に励んできたが、今報われることなく、逆境に喘いでいる。その状況を『論語』「衛霊公」を典拠とする「水火を踏む」を用いて表現し、この火急の危機に、悲鳴を上げて救いを求めており、その声は閣下のお耳に届いているに違いないと畳みかけている。この強引さも独特だが、ここに至る前の部分に、人がもし水火の難に陥っていたら、

將に**狂奔**して氣を盡くし、手足を濡らし、毛髪を焦がし、之を救ひて辭せざらんとするなり。(將狂奔盡氣、濡手足、焦毛髪、救之而不辭也。)

と述べる。ここに見える「狂奔」は①に分類すべき一般的用例だが、自らの窮状をかくも率直且つ具体的な比喻によって訴える中で用いられて、強烈な効果を放っている。興味深いことに、この上書から十二年後(元和二年、八〇五、四十歳)にも韓愈は同様の表現を用いている。

それは「釈言」と題する文章(卷一三)で、韓愈についての二種の讒言に対する彼の釈明である。前半は宰相鄭綱が韓愈に詩文を所望したので作品を献上したが、宰相の側近が、韓愈は宰相には自分の作は理解できないと言っていると讒言したという。それに対して韓愈は、以下のように釈明する。

人が傲慢な言動をするのは、恃みとする所があるからだ、自分には権貴の後ろ盾も、身分も資産も無い、それ故傲れる道理がないと記した後、

若し夫れ**狂惑喪心**の人、河を踏みて火に入り、妄言して罵詈する者は、則ち之れ有らん。而るに愈は人其の是の疾無きを知るなり。(若夫狂惑喪心之人、蹈河而入火、妄言而罵詈者、則有之矣。而愈人知其無是疾也。)

と、先述の「水火を踏む」に類似した表現と共に「狂惑」の人を引き合に出して、自分はそうではないと強弁する。

後半は翰林学士等への釈明で、ここでも同様に、

愈や**狂**ならず愚ならず、河を踏みて火に入り、風を病みて妄りに

罵らず。(愈也不狂不愚、不蹈河而入火、病風而妄罵。)

と、弁明する。「風」は「瘋」、狂疾のことである。十二年後の彼は、正面きつて、自分は狂人でも愚者でもないと訴える。当時彼は左遷された陽山から、二年ぶりに国士博士として都に戻ってきた翌年のことである。その後の彼の人生を俯瞰すれば、わずかな浮沈はあるものの、丁度柳宗元と明暗を逆にする形で、この時期から総じて順調な官吏生活が始まる。そういう予感を抱いていたか定かではないが、四十代の始まりに都に戻れたという弾む思いはあっただろう。そんな時に、二種の讒言を聞き、勢いに乗って当該文を認めた。それは現実的に讒言者に対する牽制の意もあっただろうが、単にそれだけではなく、権謀術数の渦巻く朝廷内で、讒言の卑劣さ、無意味さを、我が身を具体例として率直に訴えたのである。かような文脈の中で、己を狂人と強調することは有り得ない。十二年前の比喩を反転させて、真つ当な自己を表現している。だが反転してはいるものの、ここに韓愈の《狂》に対するこだわりを看取し得るのであるまいか。韓愈の自己認識の中に、年齢や状況を越えて一貫して《狂》が重要なファクターとして位置していたことが明白である。それはさらに十二年後、五十二歳の時の有名な「論仏骨表」を上書し、潮州刺史に左遷された時の陳謝の上表にまで、継承されている。冒頭から二箇所《狂》字が用いられている。

臣は**狂妄** しやんてん 蠢愚、礼度を識らざるを以て、上表して佛骨の事を陳べ、言は不敬に渉る。名を正し罪を定むれば、万死も猶輕し。陛下は

臣の愚忠を哀れみ、臣の**狂直**を恕し、謂へらく、臣の言は罪す可しと雖も、心は亦た他無しと。(臣以狂妄蠢愚、不識禮度、上表陳佛骨事、言涉不敬。正名定罪、萬死猶輕。陛下哀臣愚忠、恕臣狂直、謂臣言雖可罪、心亦無他。)[潮州刺史謝上表] 卷三九

ここではひたすら自らを「狂妄」「狂直」として卑下し、帝への無礼をそのせいにして詫びている。この卑屈なまでの自己矮小化を今云々するつもりはない。注目すべきは「萬死」に値する極限状況にあつても、いやだからこそ、韓愈は黙することなく悔悛の情を帝に直接訴えていることである。換言すれば、韓愈の《狂》は外に向けて直情的に迸る熱い奔流といえよう。

最後に、韓愈とほぼ同時代の李肇による記述を挙げよう。

韓愈は奇を好み、客と畢山の絶峯に登る。返る可からざるを度り、乃ち遺書を作り、發狂慟哭す。華陰の令(長官)百計もて之を取り、乃ち下る。(韓愈好奇、與客登畢山絶峯。度不可返、乃作遺書、發狂慟哭。華陰令百計取之、乃下。)唐・李肇『国史補』卷中^③

韓愈は貞元十八年(八〇二、三十五歳)春、四門博士に着任後、畢山に登り、三上氏前掲論文も引くように、四年後の元和元年(八〇六、三十九歳)「答張徹」(卷二)詩中、この時の登山を回想しているので、登山自体は事実であろう。だがその遺書が残っていない以上、彼の言動が事実であるか否か定かではない。しかしこれまで見てきた如く、極限状

況に陥った彼が狂ったような勢いで、もしくは自らを〈狂〉と関われさせて筆を執った姿を想起すれば、あながち単なる逸話として退けられまい。そして興味深いことに、約百年後、この逸話を読んで、慨嘆した人物がいる。唐末、天復元年（九〇一）の進士、沈顔である。「登華旨」と題する短文（『全唐文』巻八六八）で、李肇は韓愈の言動を「〈好奇〉の過ぎたること」として揶揄していると批判し、それは韓愈の真意を理解していないと、激しい調子で嘆いている。「悲しいかな、文公（韓愈の諡）の旨、沈子微^なかりせば、晦に幾^{ちか}からんや」と。

沈顔に拠れば、韓愈の真意は「仲尼の麟を悲しむは、悲しみは麟に在らず^④」と同様、「事を假りて時を諷」することにあり、崑山に登るような危険を冒しても、立身出世を求めて止まない輩を憤っているのだと説く。この解釈こそ、唐代の人々が韓愈の熱い〈狂〉を受け入れ、最終的には支持した根拠、そして彼自身も臆せず上書を繰り返した所以を示しているよう。それは孔子を持ち出すまでもなく、韓愈の確信に満ちた、揺るぎない儒教的価値観である。卑屈ともいふべき先の「潮州刺史謝上表」においても、中段、

陛下の功德を論述するに於て、詩書と相表裏し、歌詩を作為して之を郊廟に薦め、——中略——之を詩書の策に編んで愧づる無く、之を天地の間に措いて虧くる無し。古人をして復た生ぜしむと雖も、臣未だ肯て多くは譲らず。（於論述陛下功德、與詩書相表裏、作爲歌詩、薦之郊廟、——中略——編之乎詩書之策而無愧、措之乎天地之間而無虧。雖使古人復生、臣未肯多讓。）

「詩書」即ち『詩經』『書經』を引き合いに出して、己の詩文は、この儒教の經典に何ら遜色ないと豪語するのである。

先に引いた李肇の文にもあるように、韓愈及び孟郊・賈島・李賀などの所謂韓門の詩風は〈奇〉と称されることが多い。それが中唐文学の特質の一であることは、川合康三「奇——中唐における文学言語規範の逸脱——」に詳しい。^①それに拠れば、〈奇〉は「規範からの偏差」「規範性からの逸脱」と定義されている。さらに許容される〈奇〉の条件について、「それが衆人を納得させうる〈理〉の範囲におさまっている」こと、古くは、梁・劉勰『文心雕龍』にも見える「経書的な正統性」を有していることを指摘する。すなわち、韓愈の〈奇〉は外に向かつて進むマグマのような〈狂〉というパトスに、儒教という枠組みを与えることで成立し得た作風だったといえよう。柳宗元が韓愈の「猖狂」を揚雄よりも優れていると極めて高く評価した根拠も、その価値観故だったと解されるのである。それは上述のごとく、柳宗元が自らの〈狂〉を凝視し、それを克服しようとする基盤でもあった。ここに両者の共通性が浮かび上がると共に、柳宗元の〈狂〉が、韓愈の〈狂〉とは逆の、内向的で、あくまでも怜悯な〈狂〉であるという対蹠的特質が明らかになったといえよう。

終章に代えて——〈愚〉との関わり

前述の如く、柳宗元は〈狂〉の字を自己表現にも用いている。十二例の多さになるが、その殆どが自嘲的否定的に用いられている。一篇

〔上権徳輿補闕溫卷決進退啓〕卷三六を除き、他は全て、流謫左遷後の文である。例えば、「答問」（卷一五）は題名通り、「客」が問い、柳先生が答えるという問答体の形式を用いた言説文である。問いかけは「先生は古を学んだ人ようですが、道が行われている世の中で、その志を振うことができず、一人、罪科に処せられた。古人の書を読まれて、あるべき道、行うべきことを知りながら、現実には、人道に悖る結果になった。今の世に一体何を表そうとしているのですか？」と最初からかなり辛辣である。それに対して、『柳先生』は次のように答える。

僕少くして嘗て学問すれども、師の説に根ざさず、心に古書を信じ、以為く凡そ事は皆易しと。之を析^{さだ}むるに当世の急務を以てせず、徒らに口を開きて言ひ、目を閉ぢて息み、挺^{ひき}んでて行き、蹶^{おそ}きて伏するを知るのみ。喜怒を窮めず、曲直を究めず、羅を衝き、奔に陥りて、顛^{てん}踏^{たふ}するを知らず。愚^ぐ悖^{へい}狂^{きやう}なること、是の若く甚だし。（僕少嘗學問、不根師説、心信古書、以為凡事皆易。不折之以當世急務、徒知開口而言、閉目而息、挺而行、蹶而伏。不窮喜怒、不究曲直、衝羅陷奔、不知顛踏。愚悖狂悖、若是甚矣。）

これは、学問を囓っただけで道理がわかった気になっていた昔を、挫折後の今、痛々しいまでに反省している文章であり、その極め付きに「愚悖狂悖」という過激なまでの言辭を用いている。このほか、元和八年（八一三）、憲宗の時の宰相、武元衡が西川節度使として蜀から訪れたときの上申書にも、「某啓す、某愚陋^{ぐろう}狂簡^{きやうかん}にして、周防するを知らず」

（卷三五「上西川武元衡相公謝撫問啓」）と見える。このように、彼が自己表現に〈狂〉を用いる時には、〈愚〉と共に記すことが多い。この〈愚〉は、後述の「八愚」を持ち出すまでもなく柳宗元詩文において最も本質的で重要なタームである。〈狂〉は〈愚〉とどう異なるのか、その関わりはいかなるものか、〈愚〉との比較をすることで、柳宗元にとって〈狂〉がいかなる意味を持っていたかが、より明らかになるのではないだろうか。

柳宗元の〈愚〉に関する最も有名な作品は、次の「愚溪詩序」（卷二四）であろう。

永州に左遷された柳宗元は、その山水に親しむことで、挫折感を慰撫した。「愚溪」もその一つで、彼の命名による溪谷である。この序文では、その命名の由来を説いている。四段落から成る前半第一・二段落は、地元では、「冉^{ぜん}溪」「染溪」と呼ばれていたこの谷川が気に入る、永州に来て五年後、寺の仮寓からそのほとりに居を構えたが「余は愚を以て罪に触れ」この地に流されたから「愚溪」と名付け、愚溪周辺の丘・泉・溝・池・堂・亭・島のすべてにも〈愚〉の名前をつけた、自分が〈愚〉なので、「^{みな}咸愚を以て辱めらる」と述べる。愚溪を入れて、すべて「八愚」の小世界ができあがったのである。

第三段落では、本来「知者が^{ちの}楽む」とされる「水」（『論語』雍也）でありながら何故愚溪は辱められるかと自ら問いかけて、水量が少なく田畑に灌水もできないなどの無益さをあげつらい、愚かな自分と同類だからと説明する。だがそれに続けて以下に見るように、彼は二人の愚者の名を挙げる。

甯武子は邦に道無ければ則ち愚なり。智にして愚と為る者なり。顔子は終日違はざること愚の如し。睿にして愚と為る者なり。皆真の愚と為すを得ず。(甯武子邦無道則愚。智而為愚者也。顔子終日不違如愚。睿而為愚者也。皆不得為真愚。)

甯武子のことは『論語』(公治長第五)に「甯武子は邦に道有れば則ち知なり。」に続く語として見えている。顔子すなわち顔回は「学を好む」で有名な孔子の弟子だが、孔子と一日中話をしても一言も反論せず、最初、愚者のように見えたという(『論語』為政第二)。この二例は愚者が智者に転じる可能性を示唆している。この後に「今余有道に遭ひて、理に違ひ事に悖る。」だから私はもともと〈愚〉なのだと強調する。だがすでに〈愚〉が〈智〉に転じる可能性を知らされた読者は、そこに彼の自己韜晦を見出さざるを得ない。それを裏書きするように、第四段落では、愚溪は世の役に立たないけれども、「善く万類を鑒らし、清瑩秀徹」で、楽器を鳴らすような美しい音を立てて、「能く愚者をして喜笑眷慕し、楽しんで去る能はざらしむるなり」と賞賛するのである。清、沈徳潜はこの文を「柳子骭髒(直を好み、志を得ないさま)の語」と評し、「善鑒万類」は、暗に自分の〈識〉を、「清瑩秀徹」は、暗に彼の〈清〉を寓していると述べている(『唐宋八家文』評)。愚溪を同類、さらに彼自身と解せば、その解釈も可能であり、彼が〈愚〉を執拗なまでに繰り返せば繰り返すほど、自らの〈智〉を誇示することになろう。それを逆説的に表現せざるを得ないのは、彼の境遇の厳しさと孤獨感ゆえであろう。罪人として監視下に置かれていた永州の仮寓で母を失い、

次いで八司馬の同志凌準が逝き、愚溪転居と相前後して十歳の娘を亡くし、転居の翌年、同志呂温も逝去して深まる孤獨感。さらに戸崎哲彦「柳宗元〈終に永州の民と為るに甘んず〉」が指摘する如く、成徳軍節度使王承宗討伐成功による大赦への期待が潰えてしまい、量移への期待が完全に断たれてしまった。⁴³⁾ 柳宗元はまさに過酷な精神的危機に陥っていたのである。それゆえの屈折した〈愚〉には両義性を認めるべきであろう。そうすると、先述した〈狂〉との類似性が浮かび上がってくる。二語とも、一般的には負を意味する言葉でありながら、〈愚〉は〈智〉へ、〈狂〉は〈聖〉へと反転しうる両義性を含んでいる。そして、柳宗元の〈愚〉も〈狂〉も儒教的価値観がその基盤になっている。その意味で〈愚〉と〈狂〉は、共に彼の精神的危機を支える重要な言葉であった。では〈愚〉と〈狂〉の相違は、何であろうか？ 谷口真由実氏は、「狂夫」という語について、『史記』淮陰侯列傳の「智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千慮に必ず一得有り。故に曰く、狂夫の言も、聖人焉れを択る、と」を引き、ここには「時と場合によって、〈狂夫〉の言が〈聖人〉に採用されうること」が述べられており、「狂夫」は「愚者」をいう場合に用いられるが、単に愚かというだけではなく「潜在的に異能を有する存在」、「通常の知恵をこえた〈聖人〉に受け入れられる超越的な知恵の持ち主」として愚者との相違に論及する。⁴⁴⁾ 換言すれば、〈狂〉には〈愚〉にはない、規範から解放された自由な超越性、聖性が存在しているといえよう。これは、先述した如く、『書経』「多方」の「惟れ狂なるも克く念はば聖と作る」に基づく柳宗元の〈狂〉観に通じており、「李赤傳」に則していえば、李赤は単なる「愚者」ではなく、「狂夫」で

あるがゆえに、初めて廁を天帝の住居である「清都」と捉えられたのである。そして柳宗元は、その《狂》を書くことによって、《聖》に近づくことが可能になり、自らの狂気を客観視して精神的危機を脱し得たのではあるまいか。

「愚溪詩序」の最後に彼はいう。自分は世俗に合わせられないけれど「文墨を以て自ら慰む。万物を漱滌^{そうてき}し、百態を牢籠して、之を避くる所無し。愚辞を以て愚溪を歌へば、則ち茫然として違はず」と。すなわち、彼は「愚辞」を用いて「愚溪」を書くことによって、慰め癒されることができた。さすれば「愚辞」を超える、いわば「狂辞」を用いて「李赤傳」を書くことによって、自身の苦悩と狂気を伶俐に凝視することが可能になったのではないか。韓愈と同様、儒教的価値観を基盤にしながらも、韓愈とは異なる内向的で伶俐な凝視が、「李赤傳」論贊の「欲利好悪を以て其の神を遷して返らざること無ければ、則ち幸ひなり。また何の暇ありてか赤を笑はんや」は、その結果であり、単なる人間社会への諷刺の寓言ではない。彼は遂に自身をも含めた人間存在の不条理性という、現代にも通じる普遍的人間観に到達し得たのである。

そして沈徳潜も評したように、柳宗元の自己の本質に対する評価は《清瑩・秀徹》である。ここで、最初に挙げた「江雪」の詩を想起すべきであろう。永州後期、愚溪時代の作とされるこの詩の「清峭」なる世界、降りしきる雪の中、張りつめた清絶な美の空間、その中で孤獨に釣りをする一人の翁、それはまさしく愚溪のほとりで、狂気と紙一重の緊張をはらんだ自己を凝視する柳宗元の姿だったのではないか。同時にそれは紛うことなく、対蹠的作品「李赤傳」の作者の姿そのものだったと

いえよう。

注

- (1) 底本は、呉文治等校点『柳宗元集』（中華書局、一九七九年九月初版、二〇〇一年一月第三版）、校本は、『新刊増廣百家詳補唐柳先生文』（上海古籍出版社、一九九四年一月、拠北京図書館藏宋蜀刻本影印版）、魏仲舉編刊『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』（北京図書館出版社、二〇〇三年十二月）。なお訓読および解釈は、和刻本『柳河東集』（覆明、崇禎 蔣之翘輯注本、汲古書院影印）を参考にした。
- (2) 『文選』卷五一、『東方大中集』（『漢魏六朝一百三家集』所収）ではいずれも「非有先生論」と題す。
- (3) 『日知録』卷一九「古人不為人立傳」
- (4) 清、徐松撰、孟冬補正、北京燕山出版社（二〇〇三年七月）。
- (5) 中華書局、一九八三年六月。張永欽、侯志明點校説明に拠る。
- (6) 『蘇軾文集』卷六七 題跋「書李白十詠」
- (7) 『宋史』卷三七、王安石、字は平甫、王安石の弟。
- (8) 『春秋左氏傳』成公十年、六月、晋・景公は、新麦を食べようとしたが、便意を催して、廁に行き、下に落ちて亡くなった。（将食、張如廁、陷而卒。）景公の寿命は、新麦を食べる前に尽きるという巫者の予言通りになった。
- (9) 百花洲文芸出版社、一九九四年十一月
- (10) 陶侃、字は士行、鄱陽の人（『晋書』卷六六）。貧乏のため、陶侃の母が自分の髪の毛を売って酒を買ひ、役人をもてなした有名な逸話もある。
- (11) 沈慶之、字は弘先、『南史』卷三七の本傳にも同じ記述がある。「後帝」の名前を「後世の帝」という意味にかけている。
- (12) 「紫姑神」については、『異苑』卷五を初めとして、北宋、沈括『夢溪筆談』など数多く記述されている。梁、宗懐『荆楚歲時記』正月十五日の項には、古代の帝嚳（高辛氏）の娘とされている。また紫姑神に関する研究は、張曉叙「迎紫姑習俗起源新論」（『中南民族学院学报・人文社会科学版』二二卷四期、二〇〇一）など主に民俗学の研究は数多い。山崎藍「六朝、唐代の廁観について」

正と負の廁神」(『中国「社会と文化」第二号、二〇〇五年六月)も、糞土信仰と結びついた正の神と強調する。

- (13) 「方相」とは、『周礼』夏官では「熊の皮をかぶり、黄金の四つ目で、黒い上着に朱の裳」という姿で悪鬼を追ひ払うと記される。

- (14) 「李赤傳」は先行研究(岡本不二明『唐宋の小説と社会』汲古書院、二〇〇三年十月、第一部第四章「荒淫と汚濁」など)によって、左遷後、永州での作とされ、拙論もそれに従う。

- (15) 内山知也『通幽記について』(筑波中国文化論叢 八、一九九八年三月)参照。接統詞、副詞は「俄而・須臾・久之・乃・忽」など。

- (16) 注(14) 一三三頁。

- (17) 詳しくは、拙著『中国古典小説選』五【唐代Ⅱ】(明治書院、二〇〇六年六月)巻末「唐代傳奇について」参照。

- (18) 史素昭『試論唐代寄托伝記の小説化傾向及其成因』(『河南師範大学学报』哲学社会科学版、第三六卷第三期、二〇〇九年五月)など。史素昭氏は「李赤伝」借狂人李赤諷刺那个芳澤雜糅、是非顛倒的黑暗社会」と記す。

- (19) 『韓柳文研究法』香港、龍門書店、一九六九年十月、中国文学研究叢編第二輯。但し、廁鬼を王叔文と取るのは首肯し得ない。

(20) 【熟語例】

狂奔 3	狂狷 3	猖狂 1	猖狂 1	狂狂 1	狂山 2	駭狂 1
狂悖 2	狂易 2	狂吠 1	狂走 3	狂顧 1	狂狷 1	狂疾 3
狂夫 1	狂疏 3	狂者 1	狂横 1	狂惑 1	狂人 2	狂名 1
狂簡 1	狂賊 1	狂瞽 2	狂狡 1	狂言 1	狂摩 1	伴狂 1
狂叫 1	狂寇 1	(以上四十八例、単行例十例)				

- ① 異常事態(戦乱、火事など)の形容や狂的性癖(動物、蛮族など)の表現——十四例

「師歡民愛、克懷以信。 誠辭告訕 卒白其訊。 烏紺猖狂、盜海剽山。 帝命于南、遂彼群蠻。」

(卷十「崑州刺史李公誌」)
「焚傷羸老兮、炭死童孩。 叫號隳突兮、戸駭人哀。 祖夫狂走兮、倏忽往来。」
(卷十八「逐畢方文」)など。

- (21) 楊誨之は、柳宗元の岳父楊憑が元和四年(八〇九)、京兆の尹から臨賀(広西壮族自治区)の尉に左遷されたとき、永州に立ち寄った。年若い義弟が正義感強く、外にも硬骨で、それを悟らせる忠告の手紙を書いた。なお文中の孔子の言葉は、『論語』顔淵「子張問、士何如斯可謂之達矣。子曰士何哉、爾所謂達者。子張對曰、在邦必聞、在家必聞。子曰、是聞也、非達也。夫達者、質直而好義、察言而觀色、後略」また、底本は「二小子及孔子」の下に「氏」を記すが、蔣之超本注によって省いた。

- (22) 字は子雲、漢・武帝の時、十八歳で謁者給事中を拝す。後、武帝の使者として、南越に行き、漢への帰順説得に成功したが、宰相の反対に遭って殺された。二十歳だったので、『終軍終童』の語がある(『漢書』卷六四下)。

- (23) 『論語』公治長「子在陳曰、歸與歸與、吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之也」を指す。

- (24) 『論語』子路「子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也」

- (25) 『論語』では、前掲用例以外にも、「狂而不直、倜傥而不愿(頭の中が空っぽなのに、実直でない)、慴慴(無知なさ)而不信、吾不知之矣」(「泰伯」)など、「狂」に関する言説が散見し、「楚狂接輿」に出会うと、車から降りて、その話を聞くとし(「微子」、殷の紂王の暴政を避けた伴狂「箕子」を「三仁」の一人として評価している(「微子」)。

- (26) 「凡儒者之所取、大莫尚孔子。孔子七十而縦心。彼其縦之也、度不踰矩而後縦之。今子年有幾?自度果能不踰矩乎?而遽棄於縦也。傳説曰、惟狂克念作聖」。なお「書経」多方の引用の語(「惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖」)は、傳説の語ではなく、周公の言。

- (27) 『文字遊心』(平凡社、一九九六年)所収。

- (28) 廁の汚れと聖性の両義性については、飯島義晴「廁考—異界としての廁—」(『龍神と廁神』、人文書院。一九八二)、糞壤信仰についても岡本論文(注14)、山崎論文(注12)などに見える。

- (29) 韋珩、字は羣玉、貞元二年(八〇五)の進士(『登科記考補正』卷一五、徳宗時の吏部侍郎、京兆尹の韋夏卿の甥。

- (30) この評価は、恐らく揚雄の「解嘲」を踏まえた韓愈の「進学解」中の名句「狂

瀾を既倒に廻らす」などを指すのであろう。

(31) 『人文論究』第五三号、一九九二年三月。

(32) 制作年は『韓愈全集校注』（屈守元・常思春主編、四川大学出版社、一九九六年）に拠る。

(33) 「答崔立之書」（卷十六）以外は、次の三篇中に見える。「重答張籍書」（卷十四）「上張建封僕射書」（卷十七）「與鳳翔邢尚書書」（卷十八）

(34) 崔立之、字は斯立、韓愈の進士及第に先立つこと四年（貞元四年）に進士、六年に博学宏詞科及第（『登科記考補正』卷十二）。韓愈は友人として「崔候の文章苦だ捷敏」（『贈崔評事』）などと、高く評価している。顯官には至らず、正史に伝はない。

(35) 川合康三『終南山の変容』Ⅱ韓愈の「古」への志向―貞元年間を中心に―（二〇三頁から。（研文出版、一九九九年十月）所収参照。

(36) 正月二十七日、二月十六日、三月十六日の三回。いずれも卷十六所収。

(37) 世綏堂本では、「狂奔」が「往奔」になっている。今『東雅堂昌黎集註』本に拠る。

(38) 李肇は元和の中書舍人。著に『翰林志』一卷あり。『國史補』は開元から長慶間の逸事を記し、歴史を補う意図で編まれた書。

(39) 沈顔、字は、可鑄、官は兵部郎中、翰林学士など。唐代伝奇「枕中記」「任氏傳」などの作者、沈既済の曾孫。

(40) 『春秋左氏傳』哀公十四年春の伝に「西の方大野に狩し、叔孫氏の車子（御者）鉏商麟を得たり。以て不詳と爲し、以て虞人に賜ふ。仲尼之を觀て曰く、麟なりと。然る後に之を取る。」と見える。これは周の衰亡の予兆で、孔子は「麟を抱き紼を解きて、涕泗滂沱たり（拾遺記）」と悲しんだという。

(41) 前掲書、註（35）一一四頁から。所収。

(42) 「下場女子墓傳」（卷二三）に拠ると、幼名は、和娘、長安で生まれ、氣立てのよい子だった。母親が卑賤の出のため、父子一緒に暮らしたのは、遅かったという。病に倒れて後、仏教を信じて尼となり、「初心」と号した。元和五年四月三日没（享年十歳）。さらに三年後、元和八年の作とされる（王國安箋釈『柳宗元詩箋釈』卷二、上海古籍出版社、一九九三年九月に拠る）。『同劉二十八院長述舊言懷、感時書事、奉寄澧州張員外使君五十二韻之作、因其韻、増八十、通

贈二君子」の中で、「道を守りて長く絶へんことに甘んじ、心を明らかにして自ら剋んと欲す」と自殺願望も述べている。（下定雅弘『柳宗元―逆境を生き抜いた美しき魂―』勉誠社、二〇〇九年十一月、三、永州の苦悩 八六頁 の指摘に拠る。）

(43) 『東方学』第八十六輯、平成五年七月。また戸崎氏は、柳宗元が自己のみならず周辺の空間すべてを「八愚」と称したことを「自己嫌悪が九じて自己の周辺・親近者をも取り込んで同罪視してしまうという心理には病的なもののさへ感じられる」と記す。「柳宗元の「愚」称について―〈愚溪詩序〉・〈愚溪対〉の創作とその心理の深層にあるもの―」『彦根論叢』第二八三／二八四号、一九九三、十一所収。

(44) 『詩語のイメージ』第五章「日常からの逸脱」所収、東方書店、二〇〇〇年十一月。

拙論は、平成二〇・二一・二二年度科学研究費補助金による成果の一部である。